

関東地方の古代集落

三友国五郎

私の住んでいる埼玉県大宮市付近は、東京に近いため、東京都からあふれた人々がうつりすんで、日ましに住宅地化している。最近では京浜東北線の複々線化、大宮バイパスの道路工事、巨大な住宅公団の建設、工業団地の造成等進行しつつあって、変貌いちじるしいものがある。美しい雑木林や松林が切り倒され、ルーム台地はブルドーザーで、けずりとられている。したがって埋蔵文化財の発見される場合も多い。埋蔵文化財といっても歴史の新しいところであるから、多くは庶民の生活の跡である。私が関係した発掘作業も、多くは古代の住居址で、それだけに先史時代の集落の調査にめぐまれている。上尾市尾山台、川越市霞ヶ関で、大がかりな発掘を行って大集落址を明らかにすることができた。前者は四〇年九月、後者は四一年九月に行った。両者とも百近くの住居址を発掘した。これらの発掘の結果を中心にして、関東地方の古代の集落について、若干の考察を加えてみたい。

五 領 遺 跡

埼玉県の中央部にある東松山市の五領遺跡は金井塚氏によって①②③発掘調査されたものであるが、これまた稀に見

る大遺跡で、凡そ五ヘクタールに及ぶ集落址、遺跡は自然の地形によって、A・B・Cの三地区に区画されている。

昭和三二年以来七回にわたって発掘調査したもので、およそ一三四カ所の古墳時代前期の住居址が出土した。この多数の住居址は互に複合しあう堅穴も検出されているので、かならずしも同一時期に出現したものでなく、おそらく二―三代にわたって形成されたものと推定される。そのうちB地区にあたるところは一区域を全掘している。その結果古墳時代前期の堅穴住居址を二三カ所発見、そのうち古い段階のものと推定されるものが八カ所、新しいもの（古墳前期後半）と思われるものが十六カ所であった。

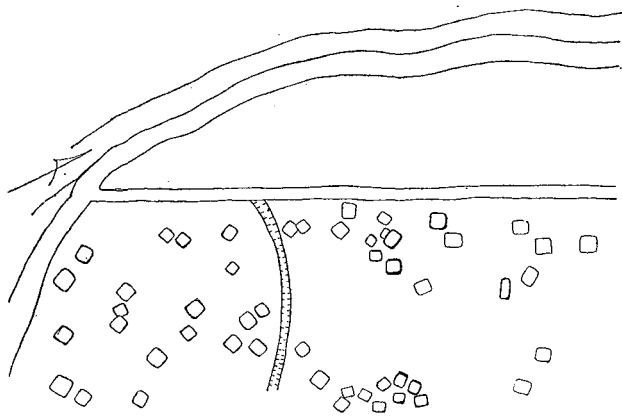
さらに最近東松山市凍番清水において、工場建設に伴って、古代住居址を発掘、これまた、金井塚氏によって行われたもので、七十余有の古代住居址を発掘している。このうちには一辺十三米に及ぶ大建築の遺構が知られて、おそらく全国においても例をみないものであると同氏はいつている④。

尾 山 台 遺 跡

綾瀬川の支流にのぞんでいる。ローム台地上にあり、水田面よりの比高は三―四米である。この遺跡が発掘されたのは、ここに住宅公団が千五百戸の住宅を建設するために、埼玉県教育委員会が、ここに埋蔵文化財があることを予知していたので、工事に入る前に緊急発掘を行ったものである。広大な面積に及ぶので、先ず最初はブルドーザーによって、約五十糎近くを全面的にけずってから、二米間隔にトレンチを設定し、それから殆んど全面発掘を行った。その結果弥生時代末期の堅穴住居址七〇余を発見している。ここでは複合しあう堅穴はわずかで、出土した土器にもほとんど相違が認められなかった。おそらくこの住居址群はほとんど単一時期に形成されたと見てよい。

7 関東地方の古代集落

発掘とは違って、機械力をふるに利用したからである。巨視的な発掘方法をとったために成果をあげることができた。そのために多少の脱落したもの、散逸したものもあったるが、重箱のすみをほじくるような丁寧な、集約的な



第1図 尾山台遺跡（A区）

ここでは堅穴の平面形は方形がおもで、長方形、胴ばりのある方形が若干存在している。ベッド状遺構をもった堅穴址は七～八米のやや大形の家に多い。しかし大形の家は出土物が貧弱である。これに対して小形の堅穴は意外に出土物が多い傾向がみとめられる。おそらく、大形の堅穴址と小形の出土物の多い堅穴は相接している場合が多いので、小堅穴は大きい堅穴の付属と考えられる。

これに対して五～六米位の中形の堅穴はベッド状遺構をもつものはないが、貯蔵穴のあるもの、比較的出土物の多いのが目につく。小形の四米以下の住居址がある、中には特別に多くの出土物をだすものがあり、炉址もあるので、住居址と思われるが、特別に土器を貯蔵する倉庫に転用したのではないかと推定されるものもある。単に物置小屋のもの、炉址のない小形のピットもあって、複雑な集落の構造を示しているように思われる。

この遺跡は発掘面積八千坪に亘る広大な面積で、それを全面的に発掘して、当時の村を復原することができたのは、従来の考古学の

方法ではこれだけ巨大な面積を短時日の間に発掘することは不可能である。第1図を見てもわかるように、まず第一に目につくことは住居の分布がグループ別に分布していることである。溝も発見することができた。この溝が何の溝であるかは掴むことができなかったが、この種の溝は今後の発掘によって理解することもできようと思う。数個ないし十個内外の住居址が群をなしていた。このような小集団、家族集団の集ってできた姿が、尾山台遺跡の実態であろう。

これだけ多くの住居址が発見されたが、農耕具というものは発見されなかった、若干の刀子、砥石は発見されているので、すでに鉄器が使用されたことは推定される。これだけの家が存在するからには、農業なしにはやっていけないことも明らかである。当然台地の前面の低地に原始的な稲作が行われたと考えられる。

このローム台地は大宮台地の支丘で、このあたりで、標高十五米内外、関東ローム層の厚さは四・五米で、下部に富士浮石層がみとめられ、その下は板橋粘土層に対比される、砂岩質、粘土質の淡色層がみられる。これが湧水線である。

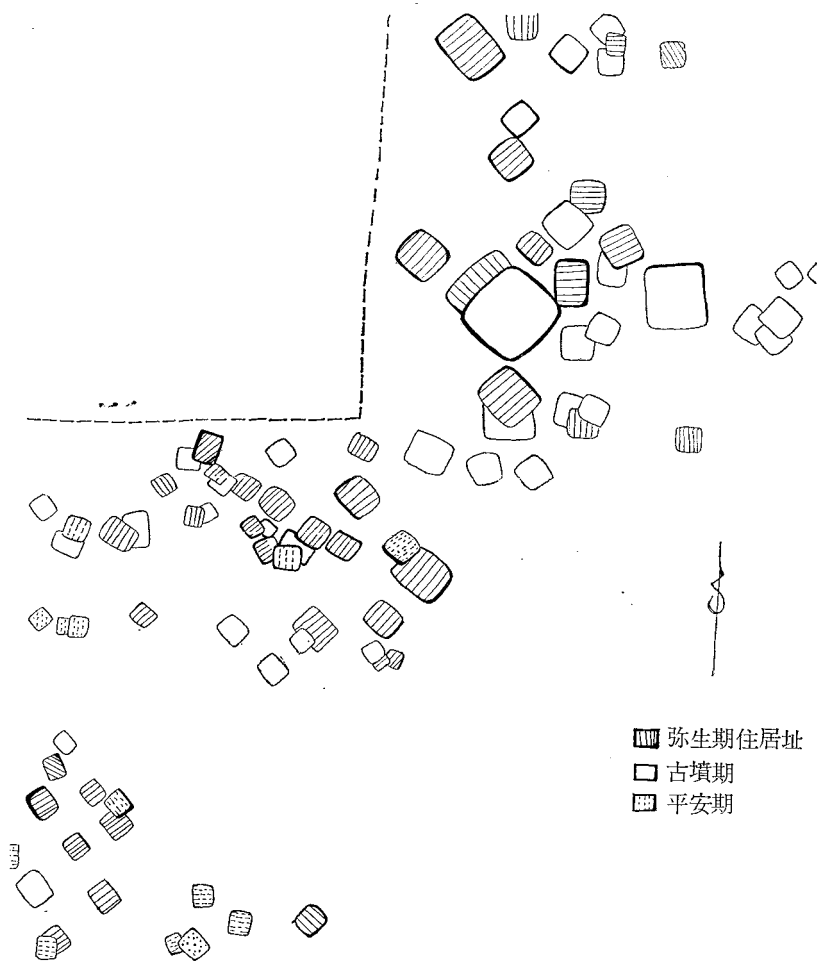
発掘のあい間に古老からきいたことであるが、昭和の中頃まではこの付近の水田は深田で、田植をせずに実蒔田であったとの事であった。現在大宮付近で実蒔田は殆んど行われなくなった。ただ谷田の奥に僅かに行われている程度で、それも自然条件からでなく、人手不足のため、労働力の調整のために行っている。

さてこうした低地は原始的な水田耕作を行うのにふさわしい場所である。台地下にある低地は水害の心配なく、旱天にも水のかれることがないところである。こうした低地を対象にいくつかの家族集団が住みついて、大きな村をなしたのであろう。

これだけ多くの住居を発見したが、出土するものは、弥生後期（前野町期を主として、若干の弥生町期を含む）それとも煮たきを使用したものが主であった。特別な階層を示すような器物は発見されなかった。普通の人が使用するものばかりであった。大宮付近にある普通の遺跡とは変わるところはなかった。出土遺物からみると、どの住居址も同じような性格をもった、同じような生活をいとなんでいたことになる。大宮市付近といわず、埼玉県内にある遺跡は、おおむね二、三個し数個内外の住居址をもつ零細なのが普通なのに、本遺跡の如く、大規模な古代村落が発生した。理由は何であつたらうか^⑥。

霞ヶ関遺跡

入間川の低段丘上に進出した遺跡である。この低位段丘は立川面に当るものと思われる。表土約三十厘、ローム層約一・七～二米ほぼ中間に不明瞭な黒色帯がある。このローム下は一米内外の砂礫層である。入間川氾濫原の地層はボーリングによると砂質シルト質よりなり、茶褐色、暗褐色をなし六～七米以下は礫よりなる。入間川の河流によるものであろう。遺跡は東上線霞ヶ関駅より徒歩数分のところにあり、東急不動産により分譲地を整地した際に発見されたもので、第一次、第二次発掘を行った。その結果一一五ヶ所の堅穴住居址が発見された。そのうち弥生時代後期の堅穴住居址は四五ヶ所、古墳時代前期の堅穴四〇ヶ所、平安時代二八ヶ所、弥生時代後期の住居は、低台地の縁辺部に多く密集している。未発掘区域があるのではつきりわからないが、大きくわけて、三つのグループにわけることができる。しかも住居址は相互に切りあうものがすくないので、単一時期に形成されたものと考えられる。もちろん、若干のずれのあることは、現在の土器の研究からやむを得ないことである。



第2図 霞ヶ関遺跡住居分布図

堅穴の平面形態は長方形をなすものが多く、楕円もしくは隅丸方形のものは数がすくない。堅穴の面積は二〇〜三〇平方メートルのものが最も多く、八〇平方メートルをこえるもの、一〇平方メートルにみたない小形の堅穴も存在して、総じて大小の差が著しい。すべての堅穴内には柱穴と炉が設備されていたが、貯蔵穴、ベッド状遺構等の内部施設をもつものがすくなく、堅穴の構造は一般に単純である。炉址はいずれも焼土だけの粗末なつくりが多く、大部分が堅穴の片側に偏してつくられていた。

古墳時代前期の堅穴住居址は出土した土器によって、そのほとんどが古墳前期に形成されたものと推定される。住居址の分布を見ると二つのグループに集合している。平面形態は方形を呈するものが多く、長方形から方形にうつりかわってゆく姿がみられる堅穴の規模にも大小の差が甚だしく、そのうちには十米四方に及ぶ大形の堅穴も存在していた。この期の住居にはベットをもつものや、貯蔵穴をもつものも出現している。この場合も大形の住居は案外に出土物がすくないのが注目される。中形の住居が思いのほかに出土遺物が多く、尾山台の場合と同じことがいえる^⑧。尾山台遺跡は弥生末期の前野町期を中心とした時代で、霞ヶ関遺跡は、弥生後期と古墳と奈良平安期の三種の遺跡が重複した遺跡である。弥生末期の村だけをとりあげてみると、住居址の形状、分布に多少の差はあるが、基本的には尾山台と共通しているといえる。同じ弥生後期でも零細遺跡の住居址群は、形状、大きさはほぼ同形のものが多いが、大遺跡の住居址群の住居址には大小の差がある。

さて、このように埼玉県内だけでも尾山台、霞関、五領、番清水のように大きな集落址が発見されている。この他神奈川県三殿台、東京都桐ヶ丘等にも最近大集落址が発見されている。このような大形の遺跡が当時の集落の姿であ

ると考えがちであるが、しかし、これは特殊の場合で、実際は小さい集落遺跡が圧倒的に多い。だから大集落址を考察する場合、ただそれだけをとりあげて論じると、当時の真の姿を描えることはできない。大集落と同時に小集落もとりあげて、総合的に考えるべきである。そして大集落と小集落とはどんな関係にあるか、小集落が自然的に大集落に成長したものなのか、それとも社会構造上の問題なのかを検討する必要がある。

私が発掘したもの、また関係したもののうち二、三をとりあげて、小形の集落について記述をすすめて見るとしよう。

大和田遺跡

大宮市大和田にあるローム台地上にある遺跡である。台地の標高は一八米で、見沼田圃を見おろす眺のよいところである。ここに老人ホームができるため、整地作業が行われた。その際住居址と推定される黒色土が発見されたので、急に発掘調査を行った（昭和四〇年七月）。その結果住居址六個を発掘することができた。

第一号住居址 東西四米、南北四・五米

第二号住居址 東西五・二米、南北五・二米 貯蔵穴と思われる浅い穴があり、拡張のあとも見られた。

第三号住居址 東西五・三米、南北四・八米 この住居から珪岩の剥片が三〇数片出土している。

この三つの住居は互に一〇米内外の距離を保ちながら、三角形の頂点の上に位置していた。この三つの住居からでてくる土器は何れも宮台式土器で、弥生中期の住居址である。この三個の家はおそらく、同時に存在していたものと推定できる。

第四住居址 東西四・五米、南北五米、四本の柱穴が見事に配置されていた。ここからでた土器は弥生後期の久ヶ原式である。第一、二、三号の住居より後の住居であることが確認できた。この第四住居と接近して、数米へだたつて、五号、六号の住居があった。しかしこの五、六号の住居はブルドーザーで削りとられて、その詳細については調査できなかったが、久ヶ原期のものである、するとこの四、五、六号の住居も、群をなしていた三箇の家が、それぞれかたまって存在していたことになる。

ブルドーザーによつて、約千数百坪の地を削平したために、住居が三ヶ所づつ群をなしていたことがわかった。一部に破壊されたものもあつたが、住居の分布状態を確認することができたので、破壊をおぎなつて余りあると思う。まことに機械の力の偉大なのを痛感した次第である。これを人間の労力で発掘したなら、このように整然と古代の小さい村を復原することは到底できない話である。

さて一、二、三号は宮台期（弥生中期）、四、五、六号は久ヶ原期（弥生後期）のものであるが、殆んど両者の間に住居そのものの構造に差を認めることができなかった。むしろ、村の姿としては、宮台期も久ヶ原期も同様のものであつたことが推定できる。

さてこの三戸の家というのは、それぞれ独立した単婚の家なのか、それとも同じ家族の成員が、夫々別の家に住んだものなのかである。当時の発展段階から考えれば、当然後者の場合であらう。そして一個の家に住みうる成員は五人内外が考えられるとすれば、十数人よりなる家族集団と推定される^⑧。

大宮公園内弥生遺跡

これは昭和二十七年プール工事の際発見されたもので、十六個の住居址を確認することができたという。完掘したものは僅か二個であったが、一号住居址は一辺五・五米の方形、五号住居址は一辺三・七米―三・九米の方形に近いもの、発掘した土器は弥生町から前野町期のもので、弥生後期も終りに近い時期のものである。確認した住居址は十六個、それぞれ五、六米間隔で点在していたので、ここでも群をなしてあつまっていた。石器は磨製石斧が一個だけ、木器類その他人工遺物は皆無であった。土器は壺形土器、碗形土器、高杯等である。

遺跡のまわりに溝がほられていた。この溝については、なかなか正体が掴めない。尾山台の場合でも、霞ヶ関の場合でも、直溝があつたが、住居との関係をつかむことはできなかった。氏族集団をかこんだものであらうと説く人もいるし、防禦用のためと説く人もいるし、まだ定説はない。とにかく弥生式以降の遺跡にみられる。それもやや集団的に住居のあらわれるところに多いようである。

ついで昭和三十年十一月にその付近を発掘した時に住居址を発掘した。この住居址は小形で、二米に三米位の長方形で、炉址もなかった。その住居址をかこんで周溝をめぐらしていたので、溝をめぐらした住居と推定したが、その後この種の遺構が各地に発見され、その結果、この種の遺構は住居でなく、周溝墓であるということになった。するとこれは住居に対応する墓地と推定され、集落と埋葬墓地との関係が示されたことになる。

この埋葬遺跡は共同的なものではなく、個人的な性格が強い。とすればこの期には特定の人の埋葬方法が行われたことになる。

弥生時代の村

その当時の普通の村はどれ位の大きさの村なのであろうか。大宮公園のプール造成の時に確認された戸数は十六個であったが、それが同時に存在したものでないことは、弥生町から前野町期にかけた間につくられたもので、その間に幾度か家の興廃があったことであらうし、正確に発掘したわけでないから、新旧を区別できないし、ただ漠然と八個内外と推定するのが精一杯である。

ところが大宮市大谷後遺跡を発掘した時は三戸しかなかった^⑧。この時も県営住宅を造営するために整地した際に、緊急発掘したのであるが、相当広い面積内（現在は県営住宅が百戸近くたっている面積）に四戸の家が、ほぼ数米内外の間隔で位置していた。そのうち三戸発掘したが、三戸とも火災にあっていたために、屋根型、梁、茅と推定されるものが焼けたまま発見された。内部構造、出土遺物では新旧を区別できないが、この四個は同時に存在していたことが確認できる。火災にあったために、ここを捨てて他に移ったと思われるからである。こうした小さな村は、或る家族が夫々別棟にわかれすんで、小村をなしたことが推定される。

前述の大和田の宮台期の村、久ヶ原期の村といい、大谷後の前野町期弥生終末期の村といい、こうした村が、最小の村であり、家族が分立してすんだ村であった。したがって出土遺物は極めて貧弱であるし、竪穴址の間には階層を示すような何物もない。こうした村々がいくつか集って地縁的に結合して大きな集団をつくれれば政治的な飛躍もあるだろうが、そうしたこともないとすれば、どの遺跡もほぼ同じような規模と同じような内容をもっているだけで、これといった特色ある遺構は認められない。いかにも個立無援のわびしさが、こうした零細な村の姿から感じられる。

各家の内部からでてくるものは、土器が殆んどで、特殊な装身具とか生産用具がみあたらない。殆んど各戸とも同じような生活をしていたのであろう、西日本でみられるような身分の差をあらわすような豪華な遺物はない。農耕生活にはいったとはいえ、とうてい農耕だけでは生活をささえることができず、大部分は採集生活にウエートをおいたのであろう。

粃痕を有する土器の発見地は

大宮公園プール内遺跡（前野町期）

〃 文化会館内遺跡（弥生町期）

岩槻市加倉遺跡（前野町期）

甕がセツトとして出土した例

大宮市下加遺跡（前野町期）

すでに原始的な稲作がいとなまれたことは一応推定されるが、その時期はおそらく弥生期から前野町期にかけてである。これは弥生期、特に前野町期の遺跡が急にその数を増していることから推定されてよい。

西日本の弥生前中期の遺跡には石庖丁が多量に発見される。これは米作農耕を指示する一の指標になるが、関東地方特に埼玉県地方では石庖丁の発見が殆んどない。関東地方では弥生後期に入って、稲作をしたとすれば、もう鉄器時代に入ったのだから、石庖丁はすでに用いなかったのであると説かれているが、果して、貴重な鉄器が一般の人々の間に用いられたのであろうか、疑問の点が多い。大きな政治的な組織に組み入れられていれば、鉄器も手に入ったであろうか、化外の民で、大きな政治権力の内に組み入れられない庶民がいかにして、鉄を手に入れることがで

きたかを思うと、疑問の点が多い。鉄器が著しく目につくのは五領期以後古墳期前期のことである。

こうした生産技術の低さ、生産力の低さをカバーするには共同体を維持するより他はないとすれば、弥生期の村は家族単位の、それも一家族の村が普通であつたのであろう。

東松山市の五領遺跡については金井塚氏によつて詳細な分析が加えられて、古代集落の構造の解明に前進を与えたものである。同氏によればB地区の住居址の分布から五号、一〇号、一三号、三三号、四八号は一樣に新しい段階のものにくらべて大形である。特に一三号は面積八一平方米という大きさで、これら住居群がほぼ半円状に分布している。

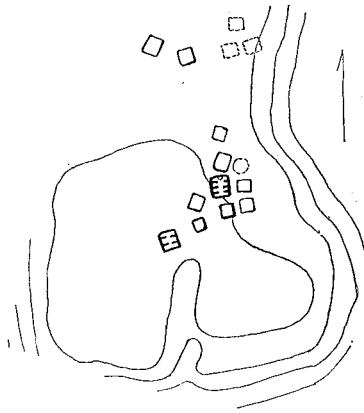
新しい段階の十六ヶ所の住居址には、直径七一〇米の空地をかこんで環状に配列し一つの単位集団を形成するという分布上の特徴を認める。個々の堅穴は小形であるが、一樣に炉をもち、中にはベッド状の床や突堤のある貯蔵穴をもつて、古い大形の住居群といちじるしくかわつている。

このように五領期の住居群が二つの時期に大別され、各々の住居群の構造と分布に明確な相違が認められた。この変貌の背景には、きわめて重要な歴史的契機がひそんでいるように思われるとのべている。一三号住居はきわだつて大きいのであるが、堅穴の構造や出土遺物は他の住居と大差はなかった。A区から発見した四二号住居は一辺一〇米をこえる大形住居であつたが、ここでも特異な現象は見られなかった。このような事実が堅穴の大小はかならずも階層的な相違をあらわすものでなく、むしろ堅穴に住居する世帯員の多寡にかかわることを示唆するものであろう。後半の住居群が小型である、住居としての条件を完備し、しかも堅穴生活の自律化を示す内部施設が整っていることは、先行した住居群から次第に分立した世帯にかわるものだったのであろうと説いている。

このように五領遺跡で確められた単位集団は、埼玉県内でもいくつかの遺跡で確認することができる①②③④。

浦和市一ツ木遺跡①

南浦和駅付近は、最近武蔵野線工事進行に伴うて、都市化がいちじるしい。浦和市では四〇年、四一年にかけて、縄文前期の大谷場貝塚、一ツ木遺跡を発掘した。その結果、古墳時代後期の住居址群を発掘して十五ヶ所の竪穴住居を明らかにした。



第3図 浦和市一ツ木遺跡

このあたりは都市化が進んで、住宅が立ち並んでいるところであるから、既に住宅化する時に破壊されたものもあり、どの程度の遺跡であるかはわからないが、今回の発掘でしられた限りでは第3図に示した如く、見事な集団的な分布を示している。

その二つの集団の距離は約七〇米を示している。さてこの集団のうち、第三号住居址はやや大形で南北七・五米、東西七・三米で隅丸方形プランであった。柱穴は六本、貯蔵穴が二個、カマドは北側に設けられ、小礫をまじえ粘土でかためられていた。この住居址には間仕切物としてあったことで、東京都志村遺跡の住居址に類似がある。この住居がこの群の中心のように思える。しかし出土物は他の住居とたいしたかわりはなかった。これより小規模であるが、一〇号住居址が間仕切した構造を示している。住居中央部、焼土の近くに丹彩のあった坏形土器、さらに三個の土玉が発見されている。貯蔵穴を住居内に三個

る。浦和市の一本木の遺跡は小さいながらも、よく観察すれば生活内容に変化のあることが認められ、或る意味で階層分化への芽生えが感じられるほどである。弥生期の後期から古墳期にかけては関東地方では一つの発展期であったことが感じられる。特に奥東京湾の周辺に、いいかえれば、利根川、荒川の沖積低地への進出が急速に行われた。奥東京湾が消滅したけれども、長い間沼沢地帯をなしていたから古代人には手に負えない自然であったが、弥生後期から、河道も安定し、自然堤防に集落ができるようになってきた。生産地域の拡大が可能になった。今まではローム台地だけが生産の対象であったが、弥生後期の頃から沖積地への進出がめだつて多くなつてきた。古墳期に入つて、一層、沖積地への進出が行われた。この事がやはり、その時代の生産を高めることになった。総体的に古墳期の集落が増加してきた。最近大宮台地の裾にそうて流れた古代荒川をつくつた自然堤防上に、多数の弥生末からの古墳期の集落址が発掘されるようになった⁹⁹。埼玉大学は浦和市の郊外の大久保地区に工事中であるが、その構内に古代荒川の流れにできた自然堤防がある。そこを発掘した結果、五箇の住居址を確認することができた。その一部から土玉を出している。こうして、今まで不生産地域であつた場所が古墳期の頃には生産地となつた。やがてこの地域に条里が施行されることになるが、それはずっと後になる。こうした古墳期の発展は、沖積地の開発が軌道にのりだしたためであらう。

この自然堤防上には小規模の後期古墳群が立地している。この古墳群を築いた人々は、おそらくこの自然堤防上に集落を築いた人達であつたらう。埼玉大学構内の遺跡はほんの一部を発掘したにすぎないが、それでも五箇以上の住居址を発掘している。今後機を得て発掘調査をすれば自然堤防上に大集落址を発見できる可能性もある。こうした地形のところには、水の管理、水からの防禦が大きな課題になつて、やがて後期古墳を築く有力な郷戸層の出現を見る

にいたったのであろう。

小遺跡の大遺跡

さて、ここで大きい遺跡と小さい遺跡をとりあげて、観察してみよう。

零細な遺跡 それは弥生中期から多く見られる。弥生後期から古墳期になると、大遺跡があらわれてくるし、同時に零細な遺跡、中間的な遺跡も多く発掘されている。こうした現象は単に自然的に小さい遺跡から成長して、大遺跡になったものではない。この遺跡地の数の増加から考えても、大遺跡地がぼつねんとして出現するものではなく、大遺跡が出現する基礎に、小遺跡群の存在ということが当然考えられる。これは弥生期ばかりでなく、縄文期でも、何れの時代にも考えられることである。ではこの大遺跡が立地するのはどんなところに成立するものなのか、これが歴史地理学の考察の対象となるのであろう。立地する条件は単に自然的条件だけできまる問題でない。自然の条件は可能的基盤を与えるだけで、社会的な構造関係とが結びついてきまるものであろう。

ここで再び、小遺跡と大遺跡の構造上の問題をしばってみるとしよう。弥生中期、縄文時代も同じだと思うが、零細な遺跡は、単一の家族からなる村であった。二〜三戸で成りたつ村はどんなに多くみてもその成員は一〇〜一五人内外の村で、これは当然一家族からなる村である。戸主を中心に、その一族からなるものである。時代は違いが大島の郷の郷戸は十数名―三十名内外からなっているが、この郷戸にあたるものであろう。この分析はさらに後にゆずるとして、さらにこうした単一家族からなる零細な遺跡はまだ他と連絡なく、孤立した社会であらう。ただ弱い地縁的なつながりが認められる程度で、到底中央の政治的な枠内にくみいれられたものでないことは、出土物を通してから推

察できる。

さて、こうした零細な遺跡が成長して中程度の遺跡に成長するためには生産の向上が裏づけになければならない。弥生期の後期前の町期にいたって、大宮公園内にある遺跡にみるような中程度の遺跡になる。大宮公園の遺跡は、発掘された住居数は一六個、もつと数があると思われるが、とりあえずかりに半数の家八箇が同時にあったとすれば、小家族なら二つの家族、大きい家族ならば一つの家族が推定される、即ち十数人内外の家族なら二家族、二〇―三〇人の家族なら一家族ということになり、その近くにある周溝墓が発見されたところからも、その可能性は強い。ここから靱痕をもつ弥生期の土器も発見されているところから、すでに一部には稲を栽培していた。こうした生産の裏づけが、こうした中程度の遺跡を成立させる根拠となったのであろう。この遺跡地の前面は低湿地である。現在はボート池になっているが、古代にあつては、旱天にも水の涸れることなく、洪水の憂もない、原始的稲作には絶好の場所であつた。靱痕を出した岩槻市加倉の遺跡も、戸数十一戸内外の中程度の村であつた。こうした遺跡がさらに成長したものが、尾山台の遺跡であろう。尾山台は、弥生終末期の遺跡であるが、数家族からなる遺跡で、いわば家族群の集合体と考えることができる分布状態から、五領遺跡にみるように、はっきりと認めることはできないが、四―五箇の群にわけることができる。

それではどうしてここに多くの家族集団が集まるようになったのであろうか。こうした家族群が統一される原理は何によつてもたらされたのであろうか。この統一の原理が、中央の力が徐々に浸透してきたことに起因する場合も考えられるし、同時に生産技術の向上にともなつて、多くの家族の共同化が必要になつた場合も考えられる。尾山台の場合はむしろ後者の方に重点があつて、自律的に、有力な郷戸が中心となつて行われたとみななければならない。出土

物、遺物からみると、特別に階層を示すようなものもないし、特別に傑出した住居址もなかったが、ただ同じ条件の家族集団が地縁的なつながりのもとに集合したのであろう。

尾山台では後に在地の豪族層に成長する階層がまだあらわれていないと見るべきである。同じことは霞ヶ関遺跡の場合でもいえる。霞ヶ関遺跡では弥生後期の村と古墳時代前期の村と平安期の村がかさなっている。これを区別して考えると、弥生後期四二戸、これは三つの群にわけられ、一つは小さい家だけ七戸で一群をなし、他の二つは大小とりまぜて一九戸よりなるものと二六戸よりなる群にわけられる。古墳期前期のものは二群にわけられ、その一つは大形の家二つを中心に一八戸からなるものと、小形の家一一戸よりなる群となり、他の一〇戸は群をなしていない。

平安時代の家は二八戸、これは二つの群をなしているが、他に孤立した家のあるのも眼につく。家の集合の度合は、弥生期のものが、最も強く、古墳期、奈良平安期と集合の度合がゆるんでいるということは、古いほど結合意識が強く、新しいものはそれがゆるんでいるように思える。

なお、この霞ヶ関遺跡より約一軒の所に牛塚という前方後円墳がある。これと集落の関係は現在のところわからない。このように霞ヶ関遺跡も、数個の家族集団があつまってできた共同体である。そのうち古墳前期の大形の家を中心としてなりたつ群が、有力な郷戸層をなしたのであろうか。大形の家は多数の家族を有した家であると同時に、それに付随した家をもったものであろう、というの大形の家から出土するものが乏しいということは、他に貯蔵用の建物をもっているからであるとも考えられる。そうした事は古墳期からみられる。東松山の番清水で方十三米以上超大形の家が出現している。これ等は家族成員の多少だけでは律しきれないと思う。

このように考えると大遺跡の成立ということは、単に自然発生的に成長したものでなく、その母体となるべき有力

な郷戸層が存在して、他の弱い家族集団を引きつける、政治的な力を持ったものがいなければ、到底考えられぬことである。階層の差を示すだけの出土物がないということは、そうした人達がまた中央の政治力に統合されていないからだとも考えられる。

時代が下るにつれて竪穴住居址が小形化してくるのは奴婢的な階層があらわれてきたことを示している。例えば川越市^④で発掘された、二米にみたない小形の家はそうした人々の住居の址である。そこには当然そうした人々を支配する人達がいたのである。彼らはすでに立派な地上住居を営んでいたから、遺跡としては残らない場合が多いのであろう。すくなくとも古墳をきづいたような人々の家は遺跡として残っていないからであらう。

そこで下総国葛飾郡大島郷の計帳によると、全村孔王部姓の郷戸で構成されている。郷戸の人員は四人から四人であった。郷戸数二二のうち、成員十人以下は三戸、一〇—二〇人の家は七戸、二〇—三〇人の家は一〇戸、三五人の家が二戸、四二人の家が一戸となっている。これらの成員の人がすむ家がどんなであったか。妻、妾、子、兄弟、弟妹、その妻子、甥姪、伯父叔姑、従兄弟姉が到底同一の家に住むことはあり得ないとすれば、大家族の家は、多数の家に分居せざるを得ないのである。一郷戸で一戸の家に住む場合もあろうし、三〇人の郷戸では中形の家なら六戸内外に分れ住まなければならない。四二人の家なら七、八戸の家に分宿しなければならない。妻と妾とは別棟にいないければならぬし、複雑な家族構成であれば、それだけ別棟に住まねばならない。竪穴住居が集団群として発掘されるのもそのためであらう。

この大島郷の計帳は養老五年（七二二年）で土器形式は真間期後半であるが、古墳終末期の集落にあてはめても、そう無理はないと思う。小さい家ばかりあつまる集落、大形の家と小さい家が組み合っている集落、中形の家のみか

らなる集落、中形と小形の家が共存している集落、色々な集落の形があるが、それはこうした家族構成が、集落の形態を投影しているからであろう。

最後に尾山台、霞ヶ関の未発表の資料を使用することを快諾された遺跡調査会柳田敏司氏、早川智明氏の御厚情に対し、さらに東松山高校の金井塚良一氏の五領遺跡、番清水遺跡についても、御教示いただいたことを記して深く謝意を表する次第である。

註と参考文献

- ① 金井塚良一 五領遺跡B区発掘調査報告 台地研究一三号(昭三八)
- ② 和島誠一・金井塚良一 集落と共同体 日本考古学 V 河出書房(昭四二)
- ③ 金井塚良一 五領遺跡C区の発掘調査 埼玉考古(昭四〇)
- ④ 金井塚良一 番清水調査報 埼玉考古学会発表(昭四二)
- ⑤ 埼玉考古学会の尾山台発掘調査記録による
- ⑥ 柳田敏司 尾山台の発掘調査 日本考古学協会発表(昭四二)
- ⑦ 霞ヶ関遺跡発掘調査記録(昭四一)
- ⑧ 尾山台、霞ヶ関遺跡調査報告書は目下整理中
- ⑧ 安岡路洋・三友国五郎 発掘 未発表
- ⑨ 大谷勝次郎 大宮公園弥生式住居址について 埼玉15(昭二七)
- ⑩ 安岡路洋 後遺跡 埼玉県文化会館(昭三七)
- ⑪ 浦和市教育委員会 一ツ木遺跡 (昭四一)
- ⑫ 三友国五郎 荒川下流域の歴史地理的調査 埼玉大学紀要(昭三九)
- ⑬ 埼玉考古学研究会 荒川下流域における考古学調査第一次調査書 (昭四二)
- ⑭ 川越市教育委員会 川越市仙波第一中学校庭発掘調査報告書(昭三二)